

A O入試出願者¹にみる国際化

出光 直樹 (横浜市立大学)

筆者は2002年4月から2005年の8月までは前職の桜美林大学にて、2005年9月からは現職の横浜市立大学にて入試広報業務に従事し、ともにA O入試にも携わってきた。両大学のA O入試は細部に違いはあるものの、基本的には1次書類審査と2次面接審査という2段階のプロセスを経るとともに、主たる審査の材料としては、出願者の今までの取り組みや志望理由等が全面に打ち出される“自己推薦型”の選抜方法であり、比較的多くの大学で採用されているスタイルである。出願者がアピールする経験には様々なものがあるが、成長を促した経験として、高校在学中の語学研修や交換留学、幼少期の海外在住経験等を挙げる者が数多く見られた。また特に印象的だったのが、日本の高校で学んできた外国人の受験生の存在であり、既存の「海外帰国生入試」や「外国人留学生入試」では把握されない“国際化”の一面が、A O入試によって浮き彫りにされている事であった。

本報告は、今回の研究会にて“大学国際化の今”をテーマとするシンポジウムが開催される機会を捉え、A O入試の出願者のプロフィールについての具体的なデータの集計を試みて、大学に入学する以前の学生たちの“国際化”の一面について紹介したものである。

横浜市立大学におけるA O入試の概要

横浜市立大学は国際総合科学部と医学部の2学部を有し、学部学生数は約4,000人。それに大学院生が約770人という規模である。医学部は医学科と看護学科からなり、入試に関しては、医学科は一般選抜の前期日程のみで募集し、看護学科は一般選抜(前期日程のみ)と指定校推薦により募集を行っている。国際総合科学部は、2005年度に従前の国際文化学部、商学部、理学部を統合改組して設置された学際型の学部であるが、入試の段階では国際教養、経営科学、そして理学の3つ²の“学系”という区分で募集し、2年進級次により細分化された“コース”に進級する教育課程を組んでいる。選抜方式としては、学部発足以来、一般選抜(前期日程のみ)の他に、指定校推薦、A O入試、海外帰国生特別選抜、外国人留学生特別選抜で募集を行い、2012年度より社会人特別選抜も実施している。

A O入試の募集人員は50名³で、国際総合科学部の入学定員650名中の約8%である。A O入試は、1次の書類審査と2次の面接審査の2段階で選抜を行い、所定の英語資格⁴を有する事が出願の条件になっているが、国籍や出身地等の制限は設けていない。審査項目には、

¹ 発表時の表題は「A O入試受験者にみる国際化」であったが、“受験者”の用語は、狭い意味では面接や筆記試験等を受験した者に限定して書類審査段階の者を含まない事があるため、本報告書作成にあたり“出願者”と変更した。

² 2013年度入試より「国際都市学系」が加わり、4つの学系での募集となる。ただし入学定員は一貫して650名のままである。

³ 学部発足時の2005年度入試では30名であったが、翌2006年度より50名(国際教養学系30、経営科学系10、理学系10)に増員した。なお、2013年度入試では48名(理学系10、8)に減員となる。

⁴ 2011年度においては、国際教養学系ではTOEFL-PBT460(iBT48)、TOEIC500、または英検2級、経営科学系と理学系ではTOEFL-PBT417(iBT35)、TOEIC400、または英検準2級以上のスコア・級が必要。

高校の調査書（評定平均値）や、提出された英語資格の級・スコアが点数化されて含まれるものの、主な材料は、(1)志願者の取り組んできた事、(2)入学後の目標・志望理由、の2点に関するプレゼンテーション（書類審査では本文がA4版2頁ずつの文章、面接審査では口頭発表と質疑）である。

AO入試出願者の“国際化”プロフィール

本報告では、横浜市立大学の2011年度AO入試の出願者183名について、出願書類（プレゼンテーションの他、高校の調査書も参照）の記載内容から、留学等の経験や外国人としての背景などに関して、以下に示す事項を見いだして集計を試みた。

短期研修	中等教育段階での、1ヶ月以内の語学研修等。
数ヶ月留学	中等教育段階での、2ヶ月～4ヶ月程度の留学。
1年留学	中等教育段階での、1学年程度の留学。
長期就学	外国での1学年を超える初等・中等教育の就学。ただし、外国の高校卒業者を除く。
外国高校卒	外国の高校卒業生。日本国内の外国人学校やインターナショナルスクールを含む。
外国人性	外国籍を有する、または少なくとも片親が外国人であるなど、外国人としての背景を有する者。

各事項に該当する者の数と全体の出願者数に占めるその割合、合格者数と全体に占めるその割合、そして各事項に該当する者毎に合格率を算出したのが次の表である。

	出願者 183 名	合格者 50 名	合格率 27.3%
短期研修	25 (13.7%)	8 (16.0%)	32.0%
数ヶ月留学	4 (2.2%)	2 (4.0%)	50.0%
1年留学	37 (20.2%)	12 (24.0%)	32.4%
長期就学	11 (6.0%)	0 (0.0%)	0.0%
外国高校卒	5 (2.7%)	4 (8.0%)	80.0%
外国人性	6 (3.3%)	3 (6.0%)	50.0%
上記の何れかに該当する者	73 (39.9%)	26 (52.0%)	35.6%

例えば、中等教育段階で1学年程度の留学を経験したものは、出願者183名中の37名と20.2%を占め、その中で合格した者が12名(合格者中の24.0%)であり、その合格率は32.4%と、出願者全体の合格率27.3%より高くなっている。

もちろん、“短期研修”と“1年留学”を両方経験したり、“外国人性”を有しかつ“1年留学”の経験を持つ者など、複数に該当する者も存在するが、それでも何らかの事項に該当

するものが出願者の73名、合格者では26名と半数前後を占めており、例年、こうした国際的な活動・経験を有する者が、AO入試に数多く出願している。また、これらの経験を有する者の合格率も比較的高く、例年に見られる傾向となっている。

それから、各事項における渡航先、修学先等を集計したものが次の表である。

短期研修	オーストラリア6、米国5、カタ 4、米国&カタ 1、NZ3、英国2、インド 1、フィリピン1、マレーシア1、中国1
数ヶ月留学	オーストラリア3、カタ 1
1年留学	米国15、オーストラリア9、NZ4、英国2、イタリ1、カタ 1、スウェーデン1、ドイツ1、フィンランド1、メキシコ1、韓国1
長期就学	米国4、中国2、オランダ & 台湾1、タイ1、ブラジル1、マレーシア1、香港1
外国高校卒	タイ3、NZ1、日本国内のインター校1
外国人性	ブラジル2、中国2、ベトナム1、在日韓国人3世1

例年の傾向としても、研修や留学の渡航先としてはやはり北米やオセアニア地域が多く占めるが、必ずしもこれらの国々に限定されている訳ではなく、バラエティが見られる。長期就学については、家族の海外赴任に帯同して過ごすケースが殆どであるが、外国の高校卒業者については、家族の海外赴任に帯同しているケースと、単身で留学しているケースが半々位の傾向となっている。

外国人の背景を有するAO入学者

今回の報告にあたって特に着目した外国人の背景を有する者について、その入学者について過去4年間分についても集計し、各年度のプロフィールをまとめたものが以下の表である。

2008年度	2009年度	2010年度	2011年度
7 / 51	4 / 50	2 / 50	6 / 50
<ul style="list-style-type: none"> ● 日系ポリビア人 14歳で来日。 ● 日系ブラジル人3世 13歳で来日。 ● ナイジェリア人 日本生まれ育ち。 ● 中国人 高1で来日し帰化。 ● モンゴル人 10歳で来日。 ● ベトナム人 15歳で来日。 ● 在日朝鮮人3世 	<ul style="list-style-type: none"> ● 母フィリピン人 日本と行き来。 ● 父パキスタン人 日本生まれ。3歳～16歳パキスタン & UAE。 ● 中国人 5歳で来日。 ● 韓国人 日本生まれ育ち。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 米国人 5歳で来日。 ● ベトナム人 10歳で来日。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 中国人 日本生まれ、小5～中1中国。 ● 中国人 中2で来日。 ● 日系ブラジル人3世 生後3ヶ月で来日。 ● 日系ブラジル人3世 中2で来日。 ● ベトナム人。 中学から来日。 ● 在日韓国人3世。

年度によって変動はあるが、AO入試の入学者の約1割は、こうした外国人としての背景を持つものでコンスタントに占められている。これらの者については、典型的な外国人入試では出願資格が認められないケースがほとんどである。もちろん、一般選抜や推薦入試等で合格してくる者も皆無ではないが、言葉の修得などのハンデ乗り越えて、かつ外国人としての背景を持つことの強みを活かすために、AO入試を積極的に選択して入学して来ている事が伺える。

ちょうど本報告を行った2ヶ月程前の2011年7月28日、横浜市立大学の学生グループが企画した「外国につながる高校生のための大学見学」という催しものが、同大学の金沢八景キャンパスで開催された。このイベントには、数十名の高校生やその保護者が参加し、キャンパス見学、授業見学、などのプログラムの他、AO入試で入学した2名の外国人の背景をもつ大学生が、自身の生い立ちや大学受験、大学生活などについてプレゼンテーションを行った。このような学生達自身によるネットワーク化や相互支援の動きについても、注目されるべき事と思われる。

おわりに

自己推薦型のスタイルをとるAO入試については、それを苦手とする高校生も多いが、海外研修や留学を経験した者にとっては、それらの活動が直接的に評価される選抜方式として積極的に活用されている。外国人の背景を持つ出願者の場合も同様で、直面してきた苦労や困難を乗り越えてきた経験を、“メリット”に転化できる選抜方式として、AO入試にチャレンジしてきている事がうかがえる。

共通して見られるモチーフは、成長をもたらす契機としての異文化体験であり、出願書類には、“アイデンティティ”、“気づき”、“誇り”といったキーワードなどが見られる。特に合格者の文章には、これら体験についての深い振り返りと洞察が多く見てとれる。一方で不合格となった者について見てみると、それらの経験が受動的なものに止まり、深い経験として消化しきれていない事が多い。また、外国人としての背景を持つ者の一部には、母語も日本語もともに未発達なままの“言語的ダブルリミテッド”と思われる者もみられ、国際化した日本の教育現場のリアルな問題の一端も見えてくる。

本報告は、筆者の桜美林大学と横浜市立大学における限られた経験と事例に基づくものではないが、日本の大学における国際化の一面について、AO入試の出願者のプロフィールに着目して紹介を試みた。入試に関わる情報はその取扱に難しさを伴うが、経年比較やより多くの大学での事例との比較も視野に、今後とも注目して行きたい課題である。